

悲しむは幸いである

— 尹東柱の詩「八福」と重ねて —

マタイによる福音書 5 : 1 - 12



司祭 ヨハネ 井田 泉

顕現後第4主日

2026年2月1日

上野聖ヨハネ教会にて

今日の福音書はイエスの「山上の説教」の冒頭部分です。

おびたしい人々がイエスに従って来ています。それぞれ悲しみ、痛みや困難を抱えた人々です。辛い現実には耐えながら神を求め、イエスに期待してここに来ています。

「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。」マタイによる福音書 5:1

イエスはこの群衆のそれぞれが抱える悲しみと痛みをご覧になりました。慈しみの目でご覧になりました。わたしたちもまた、その群衆の一人です。

「腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。」5:1-2

この後 8 回、「……幸いである」が繰り返されますが、そのうちの一つに耳を傾けましょう。

「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」5:4

人々の悲しみに触れたとき、イエスの心は悲しみに満たされました。一時しのぎの慰めを口にするにはできません。しかしこの人々を望みのないまま立ち去らせることはできない。ここでイエスの心は呻^{うめ}いて、この悲しむ人々に対して神は何と言ってくれるのかを、イエスは祈り求められました。

やがてイエスの心と口から言葉が響き始めました。

「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」

神の慰めが、イエスの心と言葉をとおして、悲しむ人々の心を包みます。イエスの祈りをとおして人々の悲しみは神に届き、神の慰めはイエスの言葉をとおして人々を包みます。

ところで今から 81 年前の 1945 年 2 月、ひとりの朝鮮の青年が福岡の刑務所に捕らえられていました。名前は尹東柱^{ユンドンジュ}といいます。日本が朝鮮を植民地支配していた時代の末期です。尹東柱の生まれは、朝鮮から中国側に入った吉林省の北間島と呼ばれるところです。家族、一族もすべてクリスチャンです。彼も幼児洗礼を受け、やがて平壤^{ピョンヤン}、そしてソウルのいずれも有名なキリスト教学校に学びました。その後、かれは海を渡って日本に留学し、はじめ立教大学に学び、ついで京都の同志社大学英文科に学びました。

夏休みになり、故郷に帰省しようとして荷物を送った直後、下宿にいるところを下鴨警察署の特高に逮捕され、裁判にかけられました。判決は 2 年の懲役。罪状は治安維持法違反。日本の国体に反抗し独立思想を宣伝した、ということでした。しかし彼は特別に独立運動をやったわけではありません。彼はただ、失われていく、奪われていく朝鮮の言葉や文化を大切にしなければならぬと友人たちと語り合い、また自分の言葉で詩や日記を書いた。それが重大な犯罪とされたのです。

81 年前、尹東柱は福岡の刑務所で最後の冬を過ごし、衰弱の果て、1945 年 2 月 16 日に獄死しました。満 27 歳でした。

彼は真実なクリスチャンで、信仰に関わる詩をいくつか残しています。

なぜ今日彼のことを話そうと思ったかという、彼が「悲しむ人々は、幸いである」というイエスの言葉を、自分の詩に歌っているからです。

それは「八福」、팔복（パルボツ）という題の詩です。「マタイ福音 5 章 3-12」という副題がついています。23 歳の時のものです。これは今日のマタイ福音書第 5 章、イエスが「心の貧しい人々は、幸い」から始まる八つの幸いを語られたものを元にしたものです。イエスはこう言われました。

「心の貧しい人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、

その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、

その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渴く人々は、幸いである、

その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、

その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、

その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、

その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。」マタイ 5:3-10

「幸い」が8回繰り返されています。それで「八福」なのですが、尹東柱はこれを全部二つ目の幸い、「悲しむ人々は、幸いである」にしてしまいました。八つをすべて「悲しむ者」に置き換えたのです。読んでみましょう。

八福

スルポハヌン ジャヌン ポギ インナニ
슬퍼하는 자는 복이 있나니

슬퍼하는 자는 복이 있나니

슬퍼하는 자는 복이 있나니

슬퍼하는 자는 복이 있나니

슬퍼하는 자는 복이 있나니

슬퍼하는 자는 복이 있나니

슬퍼하는 자는 복이 있나니

슬퍼하는 자는 복이 있나니

悲しむ者は幸いである

悲しむ者は幸いである

悲しむ者は幸いである

悲しむ者は幸いである

悲しむ者は幸いである

悲しむ者は幸いである

悲しむ者は幸いである

悲しむ者は幸いである

있나니 (インナニ) はとても柔らかい響きです。祈りをこめた信仰告白的表現で、適切に日本語に訳せません。

「悲しむ者は幸いである」が 8 回繰り返されます。「心の貧しい人々」「悲しむ人々」「柔和な人々」「義に飢え渴く人々」「憐れみ深い人々」「心の清い人々」「平和を実現する人々」「義のために迫害される人々」——これらイエスに幸いを呼びかけられた人々をすべて、「悲しむ者」に代表させた。言い換えると、それらの人々は皆、悲しみの人である。尹東柱はそうはつきりと感じたのでしょうか。

そして「八福」の最後は
저희가 영원히 슬플 것이요. わたしたちは永遠に悲しむだろう。

何という悲しいことでしょうか。わたしたちは幸いを受けつつも永遠に悲しむ、というのです。けれどもこれはこういうことではないでしょうか。——もしこの世界に悲しむ人が一人でもいるなら、その一人のために自分も悲しむ。この世界に悲しみが終わらない限りは、自分の悲しみも終わらない。

これはイエスさまの思いではないでしょうか。最後の一人の悲しみが終わるまで、イエスは一緒に悲しんでくださる。尹東柱はイエスの思いを感じていた気がします。

イエスは悲しみを知っておられました。ベタニアのラザロが

死んだとき、イエスはその墓で泣かれました。「イエスは涙を流された」(ヨハネ 11:35)と書いてあります。

またイエスのご自身が捕らえられる直前、ゲツセマネの園で祈られたとき、こう言われました。

「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである」 マタイ 26:38

イエスは悲しみを知っておられました。しかし同時に、イエスは悲しむ人を悲しみのままに放置されません。

「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」

何によって、だれによって慰められるのでしょうか。神によってです。だれも与えることのできない慰めを、神が与えてくださる。神の慰めに包まれる幸い、祝福がある。その慰めをイエスがもたらしてくださる。もっと端的に言えば、イエスが慰めてくださるのです。

深い悲しみは安易な慰めを許しません。しかし人の悲しみを知っておられ、またみずから悲しみを極みまで経験されたこのイエスは、わたしたちを慰めることができるし、また事実慰めてくださるのです。

「その人たちは慰められる」

祈りが与えられます。

「八福」尹東柱自筆

